

## オーストラリアのトーテムズム(完)

堀 喜 望

- 序、研究・調査の史的展望。 一、部族の社會的構成。
- 二、社會的トーテムズム。 三、祭祀的トーテムズム——トーテム神話。
- 四、トーテム集團。 (以上前號)
- 五、トーテム的祭祀。 六、トーテム的諸形態の機能的關聯。
- 七、結語。

## 五

以上によつて祭祀的トーテムズムの神話的背景と、並びにその精靈的に結合された集團構成について明かにされた。それは神話の祖先の生命に對する精靈的な一體性をあらはすものであり、従つてそのトーテムは集團にとつて單なる標識の記號にとどまらず、それによつてあらはされる神話的祖先を象徴すると共に、その行動の物語、即ち神話體系そのものの表現である。トーテム集團は、かかる神話の傳承管理をその任務とし、神話によつて定められてゐる儀禮を執行する義務と特權とをもつた祭祀集團であつた。然るに神話は未開人にとつて單なる物語の章節ではなくして、現實的生活の規準としてこれに權威を保證し統制するところの神聖なる本質的世界であると共に、それによつて生命と秩序を興へる現實の根源的源泉である。それは儀禮的、行爲を媒介として現實と一體化する。従つてトーテム的集團は、かかる儀禮の執行によつてその神聖性の世界に參與し、神話的太古の創造的原理を現在の中に實現し、生命

のトーテム的關聯を自覺すると共に、現實生活を神話的生命によつて充實し、部族の統一と發展を強化し、これを自然のトーテム的秩序の中に安定するといふ機能をもつ。かくしてトーテム集團は神話の儀禮的再演を中心としてその生命的・自然的本質を恢復するものといふことができる。

オーストラリアにおけるトーテム的祭祀は、トーテム的な神話的祖先の行動を象徴的に再現する歴史的・教訓的な祭祀と、同じく神話的祖先に關はるものではあるが、そのトーテム的自然種の繁殖のために執行され、自然過程を生氣づける呪術的な所謂増殖儀禮とがある。これらの祭祀は何れも部族の神聖性に參與する通路としてそれ自身神聖なるものであり、神話的聖典の嚴格な遵奉に基いて展開され、かかる神話的神聖性に許されたものによつて執行される。即ちそれは、所謂入信儀禮によつて聖的生活に導入され、集團の神祕的秘儀を傳授され、その知識と意味を啓示された特定の成年男子を成員としてゐる。かくして入信儀禮はトーテム的祭祀の體系と密接に關聯し、謂はばその豫備的段階としてトーテムの意味を擔ふものである。

オーストラリアにおいては雨季と乾季との季節の交替に従つて、その住民の生活形態が確然と區別された二つの状態を示すことは一般に注目されてゐるところである。例へば中央オーストラリアの内陸地方にあつては、長い不毛の乾燥季が続いた後に短い不規則な雨季が初まり、地上はたちまちにして緑草が芽をふき、食用になる動物が匍ひ出し繁殖し、その有様は恰も呪術によつて出現したかの觀を呈する。部族の祭祀的生活が初まるのは丁度このやうな時期においてである。食物の乏しい乾燥季に互つて家族的な小集團をなして放浪してゐた部族の人々は、氏族の神聖な場所を目ざして各地から集まつて来る。豊かな食料と一變した自然の中で興奮した感情が人々の間に反射し、昂揚した集團的連帯は自然の新しい生命と一體となつて、神聖なる祭祀的生活の連鎖がそこに繰りひろげられる。退屈な日常

的な放浪蒐集の生活は姿を没して、神話的神話に參與する強烈な刺戟に充ちた「異常」なる集團的生活の時期が、熱狂と興奮の中で彼等の生命を蘇生強化するのである。これに對して北方オーストラリアの海岸地方、例へばムルンギンの地方では、かかる祭祀的生活の時期は、北西モンsoonのもとらす過剰なる雨と洪水の季節が終つて乾燥季に入る交替の候に初まる。洪水が引いて肥沃になつた土地は、生物の繁殖にとつての素張しい舞臺である。ヤムヤ椰子が實を熟らせ、海鳥や鰐は産卵し、多くの魚や草花の食物が氾濫するのはこの時期である。神話の大蛇はこのやうな洪水を象徴してをり、それが部族祖の姉妹を呑んで不淨を淨め再び吐き出したといふ土地は、淨められた神聖清淨な姿を水中から現はす。ムルンギン諸氏族は、この神聖なる大蛇の泉を中心として集まり、そこに祭祀生活を展開する。

トテム的祭祀の一聯は、多く入信儀禮をその部分として含んでをり、トテム神話の傳授啓示がその機會に行はれる。元來このやうな入信儀禮は部族の青年を社會生活の一員として参加せしめ、その祭祀生活の神聖なる祕密に與る權利と資格を獲得せしめる所謂「通過の儀式」である。それは多く死と復活の過程を象徴する儀式と訓練を通して、少年の家族的日常的な生活から訣別して、部族の社會的成員としてのその宗教的・政治的生活の中に生れ變る通過を含んでゐる。このやうにして生理的・社會的變化に成長する青年を、社會的風習の秩序の體系に躰きなく透り込み、社會的權威と長老の統制に服従することを教へると共に、部族の共同の責任のために困窮に耐へ自己犠牲に自覺せしめる社會的・道德的機能を有する。それと同時にかかる儀禮を通して部族の神聖なる祕儀が若者たちに開かれる。神話的傳承はこの時に教へられ、それを象徴する祭具の神祕的な意味が説明され、部族の神話的歴史が儀禮的に再演される。このやうな儀禮の過程は數個の段階に分れ、部族によつてはその周期が數年に及ぶものもあり、最初の段階は十歳前後の少年から初まり、最終の最も複雑な過程を終へるには二五—三〇歳の成年に達しなければならぬものもある。その各々の段階に屬するものは特定の固有名によつて呼ばれるのが普通であり、夫々特定の儀禮訓練を経て部族的祕儀が順次に啓示され、一般に禁止されてゐるタブーが段階的に解除されて、最後に完全に發達した成人の身分が獲得されるのである。

このやうにして部族の神聖なる神話的祕密がその成員に示され、彼に關するトーテムや神話的象徴についての知識が得られ、祭祀集團への完全な参加が許されるのである。それ故にかかる入信儀禮は、トーテム的祭祀に對する謂はば豫備的前段階をなし、——事實また未開社會の一般的制度としてトーテムズと關係なき多くの種族に見られるものであるが、オーストラリアにおいてはそれは同時にトーテム的祭祀の重要な一環をなしてゐるのみならず、また部族によつては後者が入信儀禮の體系の一部を構成してゐる場合もあり、その深い内面的な關聯が認められる。例へばムルンギシのトーテム祭祀において、大蛇が女を呑むといふといふ基本的な構想はまた入信者の割禮を象徴してをり、これを頂點として展開される各種の神話的演出や舞踊において新入者に對する傳授と試練とが交錯し、このやうな祭祀の全過程を通じて若者が神聖な世界に生れ、その生命の共同的一體性に招ぜられる如きである。またブランチ族の入信儀禮においても神話的英雄の歴史の祭祀の演出が伴ひ、そのトーテムの諸の象徴が古老によつて展示説明され、トーテム的祭祀の展開においてその意味が傳授される。このやうにしてオーストラリアの入信儀禮はそのトーテム的神話によつて保證制定されると共に、トーテム的祭祀の連環の中で重要な役割を果し、それ自身がまたトーテム的な意味を擔ふものである。

入信儀禮はオーストラリアの全體を通じて見出され、その一般的儀禮經過も本質的には大體同一である。尤もこの制度を制定した神話的英雄は、東部地方にあつては天上の文化英雄と信ぜられ、中央及び西方オーストラリアにおける如くそれがトーテム的英雄とされるのと區別され、その神話系統を異にするが、しかしその區別は絶對的なものではない。オーストラリアにおいては入信儀禮は一般にトーラム的祭祀との深い關聯をその中心の本質として成立してゐる。その一般的な様式によれば、儀式は先づ新しい入信者を決定し、各地方集團に使者を派遣してその参加を要請する手續から開始される。その間に祭場が設定され、入信者は身體に祭祀の模様で飾り、胴上げや頭を咬む儀式などで準備される。それに續いて種々の肉體的手術と神祕的儀式的舞踊集會が相互に交替し、神話的祖先に關する儀式が説

明され、入信の各段階が経過する。肉體的手術は部族によつて色々であり、祕儀が啓示されるための準備、または儀禮の特定段階を通過したことを示す外的標識となるが、儀式そのものにとつては本質的要素ではない<sup>11)</sup>。そのよく知られてゐるものは中央及北西部の割禮であるが、その他下部切開はクキーンスランドの内陸、ニュー・サウス・ウェールズ及び南オーストラリアの地方で行はれ、抜齒はニュー・サウス・ウェールズに行はれるが、中央部のアラント族には知られてゐない<sup>14)</sup>。マレイ河南方では頭髮を抜き、南オーストラリア及び東クキーンスランドでは身體に瘡痕を作ることが行はれる<sup>15)</sup>。これらの肉體的手術は、埋葬儀禮において死者に施す手術に由來するものが多く、入信者が一度死んで神聖な状態に再生することを象徴するものである<sup>16)</sup>。従つてその意味は、それに續いて行はれる祕儀的な祭祀の中にあり、これを準備する試練として行はれる。これらの試練を経て、食物や女との接近などの嚴格なタブーによつて隔離された新入者は、續いて淨化と復活に導かれる。それは、新入者が長老の腕の血を注ぎかけられ、またその少量を飲む儀式、火の周圍に集つて目の眩むまでこれを凝視する火の試練などである<sup>17)</sup>。老人の流す血は神聖なる威力を有し、それ自身神話的英雄の血と同一である。かくして新入者は神話的英雄の生命と結びつき、そこから新しい生命を得て力と勇氣を興へられると共に、血を共にする集團の長老との結合が固められるのである。儀禮の最後は集團のコロボリーと妻の交換によつて盛大に飾られ、神聖なる祭具や身體の裝飾が取り去られてその幕を閉じる<sup>18)</sup>。儀禮を終つた若者は今や死から蘇つたものとして、家族や女たちに迎へられて歸還するのである。

トータムの祭祀において歴史的祭祀と呼ばれるものは、夢幻の太古の神話的英雄の行動を儀禮的に再演するものであり、部族の傳承の教訓的な意味を有する。それは、入信儀禮を経てトータム集團に迎へ入れられた成員たちによつて演ぜられるが、その過程において新入者たちが參觀し、長老は儀禮の意味を説明して、彼等にそれを教授し、若者の入信儀禮と密接に結びついてゐることは上述した如くである。演技者たちは、動物や祖先英雄の姿に扮し、儀式に

特有な彩色や意匠で飾り、英雄の生涯におけるある出来事や、それに關する事實を表現する象徴を身に着けたり手に携へて唄を歌ひながら、英雄の行動を象徴的に踊る。踊りの各節の終りになれば集團の長老たちはその意味を若者たちに解説する。ワニング、ヌルトウンジャなどの象徴、チユリナガ、ブル・ローラーなどの神祕的祭具が展示され、その秘密が説明されるのもこの時である。かくして部族的な記憶が新たにされて傳承され、ブルチイラの過去が現在の部族成員と結合される。神話的英雄に捧げられた聖域におけるかかる神話の歴史の再現は、部族的傳統の歴史を成員に傳へ、社會の歴史的權威を集團に教示保證するのみではない。かかる歴史的過去の傳統が單に過ぎ去つたものではなくて現在の活動に生きてはたらいてゐると共に、このやうな神祕的根源に觸れることによつて集團の新たな生命が喚起され、未來に對する集團の共同性がそれによつて確保されるといふ意味をもつものである。

トーテム的祭祀の今一つの種類は、所謂インテイテイウマ (intehimma) として知られるトーテム種の増殖儀禮である。神話的英雄が一定の地點にある自然種の靈的生命の中心を殘し、そこに石や泉の標識を設け、自ら祭儀を行つてそれが正常に繁殖するやうに定めたといふ信仰については既に見た如くである。増殖儀禮はかかる神話に基礎づけられ、住民たちの自然種の繁殖に對する願望と關心を行爲によつて制度化したものに他ならない。それは自然と生命とのかかる神話的紐帯を現實化することによつて、正常な季節にそのトーテム種の増殖を保證する。このやうな自然種の繁殖は、然るに單に儀禮を執行する集團の關心事たるにとどまらず、それは多くの場合部族の常食とされるものであるから、部族全體の重大な關心の對象となる。従つて祭祀の執行は、このやうなトーテム種に關心をもつ他の集團によつて要請され、そのために儀禮的な贈與が行はれるなどの仕方である。祭祀的行事の集團相互の依存關係が成立し、これを廻つて部族の社會的・經濟的な相互關係の機能をもつてゐる。またこのやうな祭祀生活において地方的な集團成員と共に、彼等に關係する特定の血縁的親族がこれに参加することは、上述のデイエリ族における姉妹の息子たちが伯父のトーテム集團において特定の祭祀的役割が與へられてゐる如き諸例によつても理解されるところである。かく

してそれは同時に成員の血縁的な社會的關係をも媒介し、その祭祀的活動を通して部族の統一の相互性に深く織り込まれてゐることが注目されるであらう。

以上の如く祭祀的トーテムイズムは、精靈的紐帶によつて結合された神聖なる地方における神話的傳承の再現及び保管を任務とするものであつた。かかる祭祀的行動を通じてトーテム的夢幻時の神聖なる世界への精靈的統一が實現され、自然と歴史との生命的一體性を保證する神聖性の役割を擔つてゐる。従つてそれはかかる祭祀的制度として、自然と人間における精靈的一體性の神話的信仰を基礎とする制度であり、それはオーストラリアのトーテムイズムの根本的な特色をなすものである。然るにかかる背景としての神話は、精靈的であると同時にまた歴史的であり、かかるものとして社會的な機能をもつてゐる。即ち自然との生命的一體性は、創造的太古の神話的英雄の行動として、傳承の記憶によつて保存された事實である。その權威が現在の行動的關係を規定すると共に、かかる歴史の祭祀的再現によつて、社會の未來の生命の統一が保證され、自然と社會の中にあつて成員の社會的行動の方向が安定されるものである。かくしてその社會的機能は、部族生活の現實に生命を附與し、その相互的關係を強化し、社會的制度に權威と安定とを保證することであり、それは自然的形態を部族の社會的關係に從つて統制すると共に、その社會的生活を自然の正常過程の中に位置づけることによつて可能とされる。即ちオーストラリアにあつては現實の社會的制度がトーテム的關聯の下に基礎づけられることを意味し、そのトーテムイズムが神話的體系を背景とすることによつて、部族の社會的生活の全體に關係し、その社會制度をトーテム的色彩をもつて相互に關聯せしめるといふ性格が特色として見出されるであらう。

註1 E. Durkheim: op. cit. p. 307 suit. (邦譯三六四頁)

2 B. Spencer: I. p. 146.

3 W. L. Warner: p. 378 sqq.

- 4 A. P. Elkin : 159. 5 B. Spencer : I. p. 175.  
 6 A. P. Elkin : p. 160. 7 W. L. Warner : p. 244, 271 sqq.  
 8 B. Spencer : I. Ch. IX, X, XI. 9 A. P. Elkin : p. 162.  
 10 *Ibid.*, p. 164 sqq. B. Spencer : I. p. 176, 225 sqq.  
 11 A. P. Elkin : p. 157, 158. 12 B. Spencer : I. p. 179 sqq  
 13 B. Spencer : I. p. 220.  
 14 A. P. Elkin : p. 156. cf. B. Spencer : I. p. 173.  
 15 A. P. Elkin : p. 156. 16 *Ibid.*, p. 159.  
 17 *Ibid.*, p. 167 sqq. スムンサーによれば、フランタ族の入信儀禮のエングウラ (Engwura) と呼ばれる火祭では、男女の集團が互ひに火のついた炬火を投げ合ふ儀式が行はれ、その最後に新入者の男子が一人々々焚火の上に青木を敷いてその煙と火の上に身を横へる。この試練を終れば、ウルリアラ (Ulliala) といふ完全に成熟したものの身分を獲得することになる。  
 B. Spencer : I. 278 sq., 294.  
 18 B. Spencer : I. p. 293 sqq.  
 19 A. P. Elkin : p. 141. 20 p. 186. 21 p. 142, 177 sq.

## 六

以上において社會的トーテミズムと祭祀的トーテミズムを中心としてオーストラリアのトーテミズムの主要形態を考察したが、この大陸にあつてはそれにとどまらず、トーテミズムの多様な形態が複雑な機能をもつて存在してゐる。然らばこれらの諸形態は如何なる機能的關係において相互に關聯し合ふのであらうか。特にその社會的及び祭祀的トーテミズムの機能は如何なる關係において理解されるべきであらうか。

既に見た如く社會的トーテムズムは、母系的氏族の血縁的な自然的血肉の紐帶を基礎とし、従つてそのトーテムに對する關係は同様な血肉的近親性の關係であつた。それが成員の「血肉」とか「皮膚」などの言葉で呼ばれる所以である。これに對して祭祀的トーテムズムの集團的基底は地縁的な「父系的」氏族であり、その結合の紐帶はかかる「地方」との精靈的關係に基く精靈的神祕的の近親性である。従つてそのトーテムに對する關係も、かかる精靈的根源としての神話的な存在者に對するそれであり、それは神話的な夢幻の太古の祖先英雄の象徴であり、かかる祖先の行動としての神話的體系そのものを意味してゐる。それ故に祭祀的トーテムはまた成員の「夢幻」、アルチイラ、または「大父」などと呼ばれてゐる。このやうなトーテムズムの構造上の區別は、夫々獨自の社會的な機能に關はり、オーストラリアのトーテムズムが複雑なる様態を示す根據をなしてゐる。かくして社會的トーテムズムは地域を超えた血縁的な母系的氏族の連帶を組織統一する役割を有する。それは祭祀的トーテムズムにおける如き成員の祭祀的な知識や身分に關はりなく、日常的な血縁的交渉の關係を規定するものであり、かかる同胞的關係に従つてそのトーテムに對する各種のタブー、成員間の近親性の禁止の社會的な行爲の規定が成立してゐる。これに對して祭祀的トーテムズムは、地域的な集團に限定され、しかも特定の神話的祕儀に參與を許された成年男子を成員とするものであるが、このやうな精靈的關係が父方居住制の婚姻風習によつて父系的氏族の地方的連帶を制度化し、部族制度としての根據を與へてゐる。それと同時にその神話的背景と祭祀的行爲の機能を通じて、集團相互の連帶性を自覺し、その部族的統一を實現するといふはたらきを有することは上述した如くである。

かくの如く祭祀的及び社會的トーテムズムは、その構造並びに機能に關して相互に區別さるべきことは、エルキンなどの新しい研究の強く指摘するところである。スペンサーリギレンの古典的な調査がこの點に關して理解の混亂を示してをり、祭祀的機能をもつトーテム形態の特殊な組織を識別せず、従つてまたその母系的氏族のトーテムズムの社會的機能を發見し得ず、オーストラリアのトーテムズムを單一的な機能の下に理解せんとした所以がこの點に見

出されるのである。トーテミズムの総合的な理解はこのやうな區別の認識の上に立ち、かかる多様なトーテム的形態がしかも一つの部族的制度として、部族的生活の中で相互に關係してゐるといふ事實に従つて明かにされなければならぬであらう。

事實においてこれら各種のトーテムの形態は、夫々單獨で特定部族の中に排他的に見出されるのではなく、同一の部族の内部に數種のトーテミズムを共存してをり、それらが部族制度として相互的な統一をなしてゐる。それと同時に部族成員はそれら諸形態の何れか一つの集團にのみ屬するといふのではなく、彼の社會的關係の多様性に従つて、各種のトーテム集團に屬してゐる。その顯著な例として、例へば南オーストラリアの北東部の部族にあつては、一人の男子は父系的な地方的祭祀的トーテムを有するのみならず、彼の母の兄の祭祀的トーテムに對しても補助的に關係する。かくの如く祭祀的トーテミズムが母系的な血縁關係に従つてそれに考慮を示すといふ傾向は、上述のデイエリ族などにおいては、自己のマドウカとして制度的な原理をなしてゐる。そのみならず彼はまた母親の社會的トーテムをその「肉」として繼承し、母親の半族トーテムにも屬するのみならず、彼の性トーテムを所有してゐるといふ如くである。このやうな事例は、その他に北部地方、東キムバレイなどの多くの部族に認められるところであつて、諸のトーテミズムは部族の各成員を結び目として相互に關聯してゐる。

かくの如くオーストラリアにおけるトーテミズムの諸形態は、その社會組織の構造的多様性に従つて、これと結合して成立し、夫々の社會的並びに祭祀的な機能を擔當しつつ相互に關係してゐる。しかしながらその社會的・祭祀的な機能の關係は、部族生活における日常的社會的生活と神聖的祭祀生活との對立並びにその關聯に基いてその中に相互的統一を形成するものである。

元來部族の祭祀的生活はその日常的生活から「離れた生活」であり、日常性から淨められたものとしてこれから區別されてゐる。そのための特別なキャンプが設けられ、人々は數哩も離れた秘密の聖地へ領り、そこで試鍊と苦行を伴

ふ集團的な行事の日々を過す。それは神話的太古の英雄が自然と生命との一體性の中で生きてゐた神聖なる生活の實現であり、それへの參與である。そこで用ゐられ展示される祭具や裝飾は、かかる秘密の意味を擔ひ、日常的生活においては深く秘められ、接觸から禁ぜられてゐる。そこでは日常的な社會的關係とは別の秩序が支配する。日常的な食物は禁忌とされ、特別の食事が儀式的な統制の下に攝取される。その血縁的近親關係は斷絶され、性の交渉は禁止される。また所謂コロボリーの集會には逆に血縁的に統制された婚姻規則は破られ、特定の婚姻禁止の關係にある男女の性的交渉が義務として課せられる。このやうな獨自の領域に開かれた世界は、部族の神話的體系において聖別され、祭祀的生活において成員の中に實現されるものである。然るに祭祀的トーテムはかかる祭祀的聖生活に關するものであり、それへの通路としての祭祀的組織を構成してゐる。そして祭祀的トーテムはかかる神聖性における自然と人間との生命的一體性を象徴し、かかるものとしてそれ自身また神聖性の領域に屬するものなのである。

しかしながらこのやうなる神聖なる秩序は、また集團のトーテム的祭祀の行爲を通して社會的な日常性の世界を淨化し、これに生命を興へて統制するところの原理である。それは日常的生活の源泉根據として社會的統制と權威づけの社會的機能を有するものであり、祭祀的トーテムイズムはこのやうな世界を結びつける連環としての部族的な制度である。上述の如き領域における世俗から「離れた」生活を營んだ人々は、心身共に新鮮な生氣に充ちて、再び日常的生活の分野に歸還する。彼等は新たな勇氣と力をもつて日常の乾燥な營みに處して行くことができる。恰も自然があつた洪水に洗はれ、雨に淨められるが如く、部族生活における社會的制度や道德的規範は、祖先の神話的行動の中で生きられたと同じ生命に裏づけられ、その部族的意味と權威が確認される。即ち祭祀的生活は、神話的な過去の世界に觸れることによつて却つて現在の日常の生を確信をもつて歩み、未來の理想を今日の營みの中に見出すことを得しめる。かくして社會的な諸制度はその機能を強化し、部族の成員はその連帯と統一とを自己のうちに自覺するに到るであらう。

以上の如く祭祀的生活と日常的生活とは、その領域に關して區別され、神聖性の神話的世界は社會的關係の組織を超越したものであるが、それと同時に前者はまたその祭祀的の行爲を通して後者の日常性に關係し、それを支持する根源として日常の現實の中にはたらいてゐる。オーストラリアの祭祀的トーテムズムは、このやうな神聖性の象徴として成立するものであり、神話的體系そのものにおける自然と人間との生命的統一の信仰を集約的に表現してゐる。それが部族的神話の演出に關はり、そのトーテム的連帶の源泉を神話的精華の原理に見出してゐることは云ふまでもないところである。然るに社會的トーテムズムにおいては、かゝる神話的源泉への直接の關與は見出されず、自然的な血肉的紐帶を基礎とする非精華的な關係であつた。それは何等の祭祀的の行爲に關係せず、またその成員として何等の入信儀禮の淨化をも必要としない自然的結合であり、そのトーテムに對する關係も何處までも血縁的・同胞的なもので、神祕的な紐帶を含まない。しかしながらこのやうな血縁的な親縁關係が、單に成員相互の間を社會的に組織するにとどまらず、同時に特定の自然種との間を結びつける紐帶となる所以は、人間と自然との精華的一體性に關するオーストラリア住民の神話的信仰にその内容的源泉を見出さねばならないであらう。

既に繰り返した如く、オーストラリアの社會的諸制度は、何れもその制定の根源と道德的な權威の源泉を神話的體系の中にもつてゐる。神話は部族の自然的現象と社會的風習制度の「起源」を物語るのみならず、それによつて同時にその正常的な運行と妥當的な營爲とを保證する力である。従つてオーストラリアの母系氏族とそのトーテム的關係も、その祭祀的諸制度や婚姻統制の諸規定などと同じく、神話的體系の原始出現の物語の中に根據をもつてゐる。そののみならず第二にかかる神話的世界にあつては、人間の生命は自然の形態と深く一體をなしてをり、社會的關係は自然的秩序の中に安定を見出し、逆にまた自然の關係は社會的な關聯において秩序づけられるといふ兩者の生命的統一の根據を含んでゐる。即ち神話的英豪が同時にトーテム的として表象され、自然と社會の體系はその行動と

して描かれてゐるのが、オーストラリア諸部族の神話的體系の特色をなしてゐる。オーストラリアのトーテム主義の諸形態は、實はこのやうな神話的信仰によつて保證されてゐるものであらう。従つて母系的な血縁的氏族のトーテム的關聯は、集團に對する動植物名の單に名目的な統一ではない。血縁的親縁の社會的關聯は、このやうな「自然」との結合によつて却つて社會的組織としての統一と秩序が與へられ、單に直接的な血肉の結合が社會的制度として組織され、安定することができるのであらう。従つてトーテム的自然種に對する血肉の親縁關係も、集團名としての自然種に對して聯想的に親縁關係を適用したといふ如き外面的結合に由來するのではない。それは自然に對する根源的な一體性の神話的體驗を基礎として可能となるものであつて、これによつて自然的過程が人間の社會的關係の中に織り込まれ、人間生活の地盤としての安定を獲得する關係を表現してゐる。血縁的關係のトーテム化とこれの社會的機能とは、實はこのやうな關係を背景として成立するものに他ならない。

かくの如くオーストラリアのトーテム主義が、社會的關係を自然と人間と社會の統一的根柢に媒介するものであり、かかる統一の根柢を神話的信仰に仰いでゐるといふ特色は、その他のトーテム主義の諸形態においても認められるところである。かかる自然と人間との一體性を最もよく表はしてゐるものは、連鎖的トーテム主義の形態をとる分類的トーテム主義において見られる。氏族・半族・四分組織などの社會組織は部族成員を特定の社會的區分に配當するが、これらの社會區分が特定のトーテム種と結合するのみならず、それを主要トーテムとしてこれに關聯する從位トーテムを、その區分に連結し、かくして自然の凡ゆる現象は、夫々の社會區分に從つてそのトーテムとして配分される。このやうにして自然の領域は社會區分に對應する分類をもつて相互に區別され、同一集團の成員と同一の親縁關係によつて屬内の諸トーテムを結合する。例へば氏族のトーテムがカンガルであれば、それは氏族成員と近親的であるのみならず、また一系の自然種がこれに屬してをり、かくて草、水、恒星などが從位トーテムとしてカンガルであるといふ如き關係である。かかる自然區分の方法によつて、自然現象は人間の社會的關係の中において秩序づけ

られると共に、人間の相互的の近親關係がまたかかる自然の秩序の中で安定を見出すといふ統一性の事情が表現されてゐる。即ちそれはトーテムイズムの諸形態がその各種の機能に關して、神話に保證された自然の生命的一體性を根源として成立する所以を物語るものであらう。

更にまたこのやうな統一の根據は、オーストラリアの社會組織がトーテム化する傾向があり、これによつて部族制度としての全體的位置を安定して行くといふ現象によつて明かにされる。それは例へば四分組織の分布としてのトーテム的複合の現象の中に顯著にあらはれてゐる。四分組織が部族成員を特定の近親關係に從つて四個の集團に分類する社會的範疇であること、そしてこのやうな區分が部族成員の複雑な親族關係を單純な範型に整理し、彼等の相互的交渉を簡單明確にするといふ機能のため、オーストラリアの諸部族によつてこの組織が廣く採用されつつある、といふ事實については既に述べたところである。この制度は部族的組織としては、比較的最近に採用されたものであることは略々實證されてをり、ニュー・サウス・ウェールズの中央部では尙ほ社會的トーテム氏族から獨立して共在してゐるが、その他の東部オーストラリア並びに西オーストラリアの諸族にあつては、これがトーテム的な仕方では考へられてゐる。即ち彼等の自然の一體性に關する生活態度は、これらの集團の成員が相互に近親關係にあるばかりでなく特定の自然種との同様の結合を想定せしめる。かくの如く社會組織がトーテム化されることによつて、それは部族生活の中でその社會的機能を満足に發展させることができる。トーテムイズムが人間の社會的關係を自然と連繫することによつてその權威と機能を保證すると云ふ所以である。

註1 A. P. Elkin: p. 133. 2 p. 144. 3 p. 155.

4 p. 185, cf. p. 146 sq. 5 p. 82 6 p. 155, 91.

七

以上われわれはオーストラリアのトーテミズムについて、専らエルキンの研究を基礎としてその形態と機能を概観した。それによればオーストラリアのトーテムの形態は、先づ第一にその社会組織の多様性に結合する複合的形態であり、それを自然の特定の領域と關聯せしめることによつて、集團的組織を部族生活の全體關聯の中に位置づけ、その集團的機能を活潑にし、部族生活における調和安定を保證するといふはたらしきものであつた。従つてそれは部族生活において複雑なる形態と機能とをもつた多様性の複合的綜合であることが理解される。然るにかかる多様性の相互關聯と統一は、オーストラリアのトーテミズムにおいては、原住民の自然と人間との生命的一體性に關する彼等の神話的信仰を基礎とすることが、その第二の特色と云ふべきものである。このやうな根源的な體驗によつてオーストラリアの社会組織はトーテムの複合を形成すると共に、多様なトーテミズムが部族組織として共存し、相互に關係する基礎が與へられるであらう。この意味においてエルキンが、トーテミズムの主題を、「人間と自然種とが一つの社会的儀式的な全體にもたらされ、共同の生命を共にすると信ぜられること」<sup>1)</sup>において定義づけ、それが「自然と生命、宇宙と人間との見解」であつて、單なる婚姻統制の如き機構ではないと云つてゐる所以が理解されるであらう。かかる全體的な見解として、「原住民の社会的集團と神話にある特色を與へて影響し、彼等の祭祀に生氣を與へこれを過去と連結する。それは彼等を自然の活動と種に結合し、相互に生命を與へる紐帯に結びつけ、生活の變遷の中にあつて自信を賦與する」ものである。トーテミズムに關するこのやうな觀念と行爲は、しかしながら第三に彼等の自然的環境に對する生活關係を條件としてをり、これに適應する彼等の生活態度の表現として成立する。その生活が自然の生産に依存し、季節的交替に支配されてゐること、彼等の適應と欲求が呪術的な仕方<sup>2)</sup>で統制されること、などの諸關係の下で、オーストラリアのトーテミズムの體系を基礎づける神話的觀念が理解されるのであらう。

かくの如く神話的世界の根柢にトーテミズムの機能的關聯の原理を見出し、その源泉として原住民の社会的生活關係を背景とすることは、デュルカームのトーテミズムの理論が尙ほ依然として深い示唆を與へるものであることを教

へてゐる。デユルケームはトーテミズムの本質を神聖性の標識とし、これを社會的統一性の象徴として宗教的信仰儀禮の原初的形態であるとし、原始人の一切の宇宙論的觀念の體系に到るまで、これとの關聯において綜合的に明かにしたことは周知のところである。それは、オーストラリアのトーテミズムが原住民の思惟と行動との全體を深く支配し、神話的體系の根源において相互的關聯を統一してゐることに關する鏡い科學的洞察を含んでゐる。しかしながらこのやうな關係はトーテミズム一般の根據を明かにするものではなく、またトーテミズムの原初性を證明するものでもない。オーストラリアのトーテミズムに關するわれわれの考察は、その複雑なる構造を機能的に關聯統一せしめる根柢を、原住民の神話的生命觀念に遡つて理解したものであつて、デユルケームの如くそれを宗教的起源を論證し、或ひはその神話的・祭祀的役割をトーテミズムの原初的形態と主張せんとするものではない。またトーテミズムの一般的構造を、これによつて何等か形而上學的な統一的原理から解釋し、これを説明せんと志すものでもない。

オーストラリアのトーテミズムがアメリカのそれなどに對して獨特の典型的形態をあらはすことは既に述べたところである。その複雑な構造において、また部族の諸の社會的關係をトーテム的な組織として成立せしめてゐる傾向によつて、それは謂はばトーテミズムの最も創造性に富んだ發達した様態を示してゐる。その生活形態が原始的であることは事實であるが、最も原始的な諸民族、例へばアングマン島人、チエクチ族などに比して發達してをり、原始的な生活状態の中にあつて、神話的生活の複雑な發展を反映した原始的觀念・制度としてこの地方に榮へ支配した機能に關しものと云へる。次にそれを原始的な宗教的禮拜の制度として演釋することのできぬことは、その祭祀的・社會的な諸の上に考察した如くである。勿論祭祀的トーテム集團がその神祕的行事の執行によつて一種の宗教的組織の機能をもつことは事實であり、またトーテム的諸形態がこのやうな「宗教的」觀念によつて相互に關係づけられることも否定できない。しかしそれは祭祀的トーテミズムの發生的な原始性を意味せず、ましてその神話的傳承が成立の起源について何等かの歴史的な保證を與へるといふものでもない。

オーストラリアの東部諸部族において、その社會的區分の組織たる四分組織の採用に従つて、これをトーテム化して四分組織トーテムズムの複合を形成することは曩に見たところであるが、その一部の地方ではかかるトーテムに對して個人が祭祀的な態度を取るといふ傾向も認められる。かくの如くトーテムズムの諸機能は部族の文化的諸形態との複合において成立するものであり、従つてその個々の形態の歴史的形成は、その一般の原理から理論的に導出されるものではない。それは夫々の部族における社會的文化的形態と諸、のトーテム的態度の要素的特色が、部族的接觸交渉の過程を通して傳播輻合される様態の個別的な分析比較を必要とするであらう。その點においてトーテム的關係の現實的關係を文化的要素の分析によつて、その特殊な複合性を明かにせんとするゴールデンワイザーの見解は、その歴史的な事實的關係を理解するための比較的方法として承認されなければならぬ。そしてかかる要素的特色を地理的な分布に従つて個別的にその傳播の過程を探求せんとするローヴィーの要請は、トーテムズムの個々の形成の事實を明かにする道であり、オーストラリアのトーテムズムの複合的形成についても適用されなければならぬといつて可いところである。従つてわれわれの所謂トーテムズムの神話的根柢は、かかる部族の個別的制度の成立發生についての「歴史的起源」を意味するのではない。それは現實のトーテムの形態の複合を可能ならしめ、その多様な形を部族的制度として相互に關聯する統一性にもたらす原理である。即ち部族の社會的諸關係をトーテム的に組織し、諸種のトーテムズムを夫々獨自の機能を營みつつ部族生活の中で相互に關係するものとして成立せしめることの根柢を意味するものである。このやうにしてそれは特定の部族生活の社會的現實に對應した統一的な觀念・行爲的體系としての意味が明かにされるであらう。

以上の如くオーストラリアのトーテムズムにおける神話的背景は、その宗教的・祭祀的制度としての歴史的起源を意味するものではなかつた。それと同時にまたそれは、部族の神話的傳承が何等かその歴史的形成について説明を與へてゐるといふでもない。神話の形成變遷の過程の批判的分析を通じてその物語る制度事件の歴史的形成を週

源することは可能であり、神話の歴史的研究の重要な課題をなすものではある。しかしそれは現實の神話の歴史の價値をそのまま肯定することではないのは勿論である。一般に未開人が神話的出來事を同時に歴史的事件と信じて傳承してゐることは事實であり、オーストラリアにおいてもトーテム的英雄の行動は太古の歴史的事實として信じられてゐる。けれども未開人の神話が歴史的な年代記的内容をもつものでないことは、今日最早や自明の事柄である。未開人の歴史の記憶は數代より以上には遡らず、それを超えると時間的繼起は空間的な同時性の意識の平面上に推積される。従つて神話的内容の個々の要素が過去の事實を含んでゐるとしても、それは時間的な過去として保存されるものでなく、事實の權威を保證する源泉としてはたらしき、現在に生きてゐるものである。それは社會的現實の相關としてその機能的中心であり、現實に生命を興へこれを統一する根柢である。かくしてそれは現實の社會的關係の變遷發展に伴つて、それ自ら生成的なものであり、従つて新しい風習制度が採用されると、神話そのものの中にその根柢が求められ、その解釋と構成が更新されるのである。このやうな神話的生成復合の事實は、オーストラリアのトーテム的神話においても認められる。例へば中央オーストラリア及び北方地方の神話において入信儀禮の制定者たる天上英雄の信仰は、トーテム的英雄によつて壓倒されて背景に退き、トーテム的關聯の中に吸收されつつある傾向が指摘されてゐる。トーテム的關係の複合發展は、このやうな神話的傳承の改訂複合を伴ふと共に、それがかかる神話的體系の中に組織されることによつて、部族的制度としての位置が保證されるといふ過程を物語つてゐる。オーストラリアにおけるトーテム主義の神話的背景とは、原住民の自然的生活關係の中に形成されるこのやうな精神的構成において、その複雑な形態と機能とが統一され、部族組織として發展し繁榮するといふ傾向が基礎づけられることを意味するものに他ならぬ。

(完)

註1 A. p. Elkin: p. 182. 2 p. 126.

3 p. 135. 4 p. 186, 191 sq. 5 p. 201.

オーストラリアのトーテム主義(完)

附記——この小篇は「トーテミズムの諸相」(人文科學)第一卷第一・二號昭和二十一年)の續篇となるものであるが、その前篇が未完結のまま中断されてをり、従つてそれに直接に連続しない關係にある。しかし本論はトーテミズムのオーストラリアにおける現實的形態の現象的分析として獨立した體裁をもつてゐる。トーテミズムに關する一つの例證的敘述として理解して頂ければ幸である。

## 彙報

### 哲學茶話會

上田泰治君「イゾモルフイズム」

時 昭和廿四年十月八日(土) 午後一時

處 北白川小倉町 人文科學(舊東方文化) 研究所講堂

會費 三十圓

久しく申絶して來た哲學茶話會(京都大學文學部哲學史教室研究發表會並談話會)を復活する運びにいたしました。

關係者各位の御來會を得て斯學の進運に寄與するところあらんことを祈願してをります。

直接御案内申上ぐべきでありますが名簿不備のため却て御通知もれの多からんことを恐れ紙上を以て御挨拶に代へます。

京大 哲學史 教室

### 次 目 號 前

アリストテレス存在論の基礎構造について(系稿) 文學士 岡野留次郎

オーストラリアのトーテミズム 文學士 堀 喜 泉

聖アウグスチヌスに於ける「文學士」の同心の問題(完) 山 田 品  
「秩序の問題(系稿)」